

第六章 太傅

第二十六條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ太傅ヲ

置キ保育ヲ掌ラシム

恭テ按スルニ太子傅ノ職ハ大寶ノ令ニ見ユ而シテ持統天皇紀ニ

以直廣壹當麻國見爲東宮太傅ノ事ヲ載セタレハ蓋其ノ由テ來ル

コト久キナリ本條天皇幼冲ノ爲ニ太傅ヲ置クコトヲ定ムルハ保

傅ノ任其ノ重キコト攝政ニ亞ケハナリ大寶令ニ傳一人、掌下而シテ以道德輔導東宮上

太傅ハ專ラ保育教導ノ任ニ止マリ大政ニ干預スルコトナク攝政

ハ大政ヲ攝行スルモ保導及天皇ノ私事ニ干渉セス

第二十七條 先帝遺命ヲ以テ太傅ヲ任セサリシトキ

ハ攝政ヨリ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ之ヲ選任

ス

第二十八條 太傅ハ攝政及其ノ子孫之ニ任スルコト

ヲ得ス

第二十九條 攝政ハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シタ

ル後ニ非サレハ太傅ヲ退職セシムルコトヲ得ス

恭テ按スルニ攝政ハ大政ヲ總攝スルノミナラス兼テ又皇家ノ内
 事ヲ監督ス故ニ先帝ノ遺命アラサリシトキハ攝政ハ太傅ヲ選任
 スルノ事ヲ怠ラサルヘク而シテ攝政及其ノ子孫ハ太傅ニ任スル
 コトヲ得ス及太傅ノ任免ハ必皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ而シ
 テ後決行スルコトヲ定ムルハ危疑ノ門ヲ慎ミ攝政ヲシテ其ノ忠
 順ヲ全クセシメムトナリ

第七章 皇族

第三十條 皇族ト稱フルハ太皇太后皇太后皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王妃內親王王妃女王ヲ謂フ

恭テ按スルニ太皇太后皇太后ハ令義解ニ謂天子、祖母登后位者爲

太皇太后下謂天子、母登后位者爲皇太后ト云ヘリ續日本紀ニ天平應

真仁正皇太后、聖武皇帝儲貳之日、納以爲妃トアリ是レ古ハ皇太子

ノ正配ヲ稱ヘテ妃ト謂ヒシナリ御息所ノ稱ハ延喜以後ノ物語ニ見ニ蓋俗稱ニシテ典例ニ非サル

リ又日本書紀ニ大津皇子妃、皇女山邊ノ文アリ持統是レ凡ソ皇子

ノ正配亦妃ト稱ヘシナリ

皇族トハ凡ソ皇胤ノ男子及其ノ正配及皇胤ノ女子ヲ謂フ凡ソ皇

族ノ男子ハ皆皇位繼承ノ權利ヲ有スル者ナリ故ニ中世以來空費

府庫ヲ以テ姓ヲ賜ヒ臣籍ニ列スルノ例ハ本條ノ取ラサル所ナリ
 皇女ニシテ異姓ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ其夫ノ身分ニ從フ故ニ本
 條ニ内親王女王ト謂ヘルハ未タ嫁セサルノ女王ヲ指スコト知ル
 ヘキナリ

太皇太后皇太后皇后ノ叙列ハ大寶令ニ依リ尊屬ノ序次ニ從フナ
 リ

第三十一條 皇子ヨリ皇玄孫ニ至ルマテハ男ヲ親王

女ヲ内親王トシ五世以下ハ男ヲ女王女ヲ女王トス

恭テ按スルニ子ノ子ヲ孫ウシゴトシ孫ノ子ヲ曾孫ヒ、コトシ曾孫ノ子ヲ玄孫ヤシ、ホ

トス和名抄ニ依ル子ヲ一世トシ孫ヲ二世トシ曾孫ヲ三世トシ玄孫ヲ四

世トシ玄孫ノ子ヲ五世トス大寶令ニ自親王五世ト謂ヘル是レナ

リ之ヲ上古ニ考フルニ皇子ハ「ミコ」ト稱ヘ皇女ハ「ヒメミコ」ト稱フ

親王内親王ノ稱ハ持統天皇紀六年正月朔、賜親王内親王女王内命婦等位ト見エタルヲ始トス。大寶令ニ凡皇兄弟皇子皆爲親王ト此ノ時未タ宣下ノ式アラズ。宣下ノ式ハ蓋淳仁天皇紀ニ兄弟姊妹悉稱親王ト見エタルヲ始トス。皇孫ニシテ親王内親王ノ宣下アリシハ三條天皇ノ皇孫敦貞親王敦元親王儂子内親王嘉子内親王ヲ始トス。紹運錄ニ見エタル龜山天皇ノ皇子恒明親王其ノ子全仁親王其ノ子滿仁親王其ノ子直仁親王其ノ子全明親王其ノ子恒直親王相嗣テ常葉井宮ト稱ヘタルハ是レ世襲親王家ノ始ナリ。蓋令ニハ親王ノ稱ハ皇兄弟皇子ニ限リシヲ其ノ後宣下式ニ依リ。歷世ノ皇孫亦親王ノ稱ヲ賜ヒシナリ。本條ニ皇玄孫以上ハ親王内親王トスルコトヲ定ムルハ現行ノ慣例ヲ斟酌シ且宣下ヲ待タスシテ皇親ノ王男王女タルコトヲ示スナリ。

大寶令五世以下ハ皇親ノ限ニ在ラス而シテ正親司ノ司ル所ハ四世以上ニ限ル然ルニ繼體天皇ノ皇位ヲ繼承シタマヘルハ實ニ應神天皇五世ノ孫ヲ以テス此レ乃中古ノ制ハ必シモ先王ノ遺範ニ非サリシナリ本條ニ五世以下王女王タルコトヲ定ムルハ宗室ノ子孫ハ五世ノ後ニ至ルモ亦皇族タルコトヲ失ハサラシメ以テ親々ノ義ヲ廣ムルナリ

文武天皇慶雲三年ノ詔ニ曰、准令、五世之王、雖得親之籍、遂入諸臣之列、顧念親々之思、不勝絕籍之痛、自今以後、五世之王、在皇親之限、其承嫡者相承爲王、自餘如令、又聖武天皇天平元年ノ詔ニ曰、五世王嫡子以上、娶孫王、生男女者、入皇親之限、自餘入慶雲三年格ト其ノ後桓武天皇延曆十年ニ至リ勅シテ令制ニ復シタリ

第三十二條

天皇支系ヨリ入テ大統ヲ承クルトキハ

皇兄弟姊妹ノ王女王タル者ニ特ニ親王内親王ノ號

ヲ宣賜ス

恭テ按スルニ大寶令ニ凡皇兄弟皇子皆爲親王トアリ是レ皇兄弟
ハ皇子ト同ク親王ト稱フヘキコト既ニ成典アルナリ天皇支系ヨ
リ入テ大統ヲ承クレハ皇兄弟姉妹ハ皆親王内親王ノ尊號ヲ得ル
ハ光仁天皇大統ヲ繼キ皇弟湯原王履井王ヲ陞セテ親王ト爲シタ
マヘルヲ以テ始例トス前條ノ注ニ引ク所淳仁天皇兄弟姉妹ノ例
亦同シ本條ニ仍宣下ノ例ヲ用井ルハ前條ト其ノ義ヲ異ニスレハ
ナリ

第三十三條 皇族ノ誕生命名婚嫁薨去ハ宮内大臣之 ヲ公告ス

恭テ按スルニ皇太子皇太孫ノ立坊ハ詔書ヲ以テ公布スルノ外凡
ソ皇族ノ生死婚及命名ハ宮内大臣ヨリ公告ス蓋皇族ハ皇統ノ係
ル所ニシテ臣民仰望ノ集マル所タリ故ニ之ヲ臣民ニ公ニシ皆聞

知ラシムルナリ

第三十四條 皇統譜及前條ニ關ル記錄ハ圖書寮ニ於

テ尙藏ス

恭テ按スルニ圖書寮尙藏スル所ノ皇統譜及皇族記錄ハ大統ノ源流ヲ徵明シ宗室ノ本末ヲ疏證ス本條特ニ之ヲ掲ケテ皇室圖書ノ登錄ハ嫌疑ヲ定メ亂萌ヲ絶ツノ典籍タルコトヲ明ニス

第三十五條 皇族ハ天皇之ヲ監督ス

恭テ按スルニ天皇ハ皇室ノ家父タリ故ニ皇族ノ廩俸ハ皇室經費ヨリ給賜シ皇族各人ノ結婚又ハ外國ニ旅行スルハ勅許ヲ要シ父ナキノ幼男幼女ノ教育及保護ハ勅命ニ由ル凡ツ皇族ハ總テ天皇監督ノ下ニ在ルコト家人ノ家父ニ於ケルカ如シ此レ乃皇族ノ幸福及榮譽ヲ保ツ所以ナリ

第三十六條 攝政在任ノ時ハ前條ノ事ヲ攝行ス

恭テ按スルニ攝政ハ大政ヲ攝行スルノミナラス兼テ又皇室家父
タルノ事ヲ攝行ス故ニ皇族各人ハ攝政ニ對シ家人從順ノ義務ヲ
有スヘシ

第三十七條 皇族男女幼年ニシテ父ナキ者ハ宮内ノ
官僚ニ命シ保育ヲ掌ラシム事宜ニ依リ天皇ハ其ノ
父母ノ選舉セル後見人ヲ認可シ又ハ之ヲ勅選スヘ
シ

第三十八條 皇族ノ後見人ハ成年以上ノ皇族ニ限ル
恭テ按スルニ天皇ハ皇族ヲ監督ス故ニ皇族幼年ニシテ父ナキト
キハ勅旨ニ由リ宮内ノ官僚ニ命シテ保育ヲ掌ラシムヘシ或ハ其
ノ父ノ遺囑ニ由リ後見人ヲ選舉シ又ハ其ノ母後見人ヲ選舉シタ

ルトキハ天皇之ヲ認可シ或ハ特ニ後見人ヲ勅選シテ保育ニ當ラシムルコトアルハ皆事宜ニ從フ而シテ後見人ノ行フ所ノ事ハ仍天皇親ラ之ヲ監督スヘシ

第三十九條 皇族ノ婚嫁ハ同族又ハ勅旨ニ由リ特ニ

認許セラレタル華族ニ限ル

恭テ按スルニ皇族ノ婚嫁ト謂ヘルハ皇后ヲ擇フコト固ヨリ其中ニ在リ上代皇后ハ皇親ニ擇フ其ノ人臣ノ家ニ取レルハ聖武天皇藤原不比等ノ女安宿媛ヲ立テ、皇后ト爲シタマヘルニ始マル仁德天皇ノ磐之媛ニ於ケルハ聖武天皇ノ詔ノ先例トシテ引繼シタル所ナレトモ其ノ實仍皇族ニ係ル中古以來皇親ノ外ハ藤原氏橘氏平氏源氏ノ四姓ヨリ皇后ヲ奉ルコトハナレリ共ノ他ノ皇族ハ大寶令ニ凡王娶親王、臣娶五世王者聽、唯五世王不得娶親王ト此レ其ノ婚娶ニ於テ尤名位ヲ重ンシタルナリ本條

ハ祖宗ノ古法ヲ存重シ又華族ノ家ニ婚嫁スルコトヲ許スハ兼テ
中世以來ノ慣例ヲ斟酌シ貞淑ヲ擇フノ道ヲ廣ムルナリ而シテ又
特ニ認許ヲ得タルノ家ニ限ルハ名門右族ヲ擇ハムトナリ

第四十條 皇族ノ婚嫁ハ勅許ニ由ル

恭テ按スルニ皇族ノ婚嫁必勅許ニ由ルハ至尊監督ノ大權ニ依リ
皇族ノ榮譽ヲ保タシメムトナリ

第四十一條 皇族ノ婚嫁ヲ許可スルノ勅書ハ宮内大

臣之ニ副署ス

恭テ按スルニ皇族ノ婚嫁本法ニ違ヒ勅許ヲ得サル者ハ其ノ婚嫁
ヲ認メス其ノ婦ハ皇族タルノ禮遇及名稱ヲ得サルヘシ故ニ勅許
ヲ付スルニ當テ亦特ニ慎重ノ意ヲ致ス

第四十二條 皇族ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

恭テ按スルニ皇家養子猶子ノ習アルハ蓋嵯峨天皇ノ皇子源定ヲ
 淳和天皇ノ子トシ時ノ人定ニニ父源融ヲ仁明天皇ノ子トセラレ
 タルニ始マル而シテ未タ養子猶子ノ稱ヘハアラス皇族ノ支孫ニ
 シテ天皇ノ養子トナレルハ融ノ孫是茂ヲ光孝天皇ノ養子トセラ
 レタルニ始マル猶子ノ稱ハ神皇正統紀ニ龜山院天皇姪仁ヲ猶
 子ニシテ東宮ニスエタマフトアリ及職原鈔ニ忠房親王爲後宇多
 院御猶子トアルヲ始トス猶子トハ蓋皇子ニ準スルノ義ナリ大日本史
ニ清仁親王與弟昭登等並帝(花山帝)薙髮後所生也帝最愛清仁託左
大臣道長請以皇子準冷泉上皇諸子敕以清仁爲第五子昭登第六子
並爲親王凡此レ皆中世以來ノ沿習ニシテ古ノ典例ニ非サルナリ本條
 ハ獨異姓ニ於ケルノミナラス皇族互ニ男女ノ養子ヲ爲スコトヲ
 禁スルハ宗系紊亂ノ門ヲ塞クナリ其ノ皇猶子ノ事ニ及ハサルハ
 皇養子ト同例ナレハナリ

第四十三條 皇族國疆ノ外ニ旅行セムトスルトキハ
勅許ヲ請フヘシ

恭テ按スルニ此レ皇族天皇ノ監督ニ屬スル要件ノ一ニ居ル者ナ
リ疆外ニ旅行スル者勅許ヲ要スルトキハ外國政府ノ文武ノ官ニ
補スル者ハ謂ハスシテ知ルヘキナリ

第四十四條 皇族女子ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ皇族ノ
列ニ在ラス但シ特旨ニ依リ仍内親王女王ノ稱ヲ有
セシムルコトアルヘシ

恭テ按スルニ女子ノ嫁スル者ハ各其ノ夫ノ身分ニ從フ故ニ皇族
女子ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ皇族ノ列ニ在ラス此ニ臣籍ト謂ヘル
ハ專ラ異姓ノ臣籍ヲ謂ヘルナリ仍内親王又ハ女王ノ尊稱ヲ有セ
シムルコトアルハ近時ノ前例ニ依ルナリ然ルニ亦必特旨アルヲ

須ツハ其ノ特ニ賜ヘルノ尊稱ニシテ其ノ身分ニ依ルニ非サレハ
ナリ

第八章 世傳御料

第四十五條 土地物件ノ世傳御料ト定メタルモノハ
分割讓與スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ世傳御料ハ皇室ニ係屬ス天皇ハ之ヲ後嗣ニ傳ヘ皇
統ノ遺物トシ隨意ニ分割シ又ハ讓與セラル、コトヲ得ス故ニ後
嵯峨天皇後深草天皇ヲシテ龜山天皇ニ位ヲ傳ヘシメ遺命ヲ以テ
長講堂領二百八十所ヲ後深草天皇ノ子孫ニ讓與アリタルカ如キ
ハ一時ノ變例ニシテ將來ニ依ルヘキノ典憲ニ非サルナリ
上代ニ屯家ミヤケヲ置カル又ハ御田ト呼フ御田ノ穀ヲ收ムルノ處ヲ屯

倉ト謂フ垂仁天皇紀ニ屯倉此云彌夜氣ト註セル是レナリ仁徳天皇紀ニ倭屯田者每御宇帝皇之屯田也其雖帝皇之子非御宇者不得掌矣トアリ是レ上古既ニ世傳御料ノ制アリテ繼體ノ天皇之ヲ掌有シタマヒシナリ其ノ他ノ屯田ハ賜予又ハ遺命ヲ以テ分割譲予セラル、コト總テ勅旨ニ隨フ者アリ即チ天皇ノ私法上ノ財産トシテ皇室ニ係屬セサル者ナリ安閑天皇紀ニ爲皇后次妃建立屯倉之地使留後代令顯前述トアルカ如キ是レ世傳御料ト其ノ類ヲ異ニスルコト知ルヘキナリ

我カ肇國ノ初夙ニ一國統治ノ公義ニ依リ豪族ノ徒ヲ斥ケテ其ノ私ニ邦土ヲ領有スルヲ許サス古事記建御雷神大國主命ニ問ヘララツ國ハ我カ御子ノ知而シテ皇室ノ經費ハ全國ノ租稅ヲ以テ之ヲラサム國ナリ云々供奉シ更ニ内庫ノ私產ヲ用非テ供給スルヲ假ラサリシハ全ク立

憲ノ主義ニ符合スル者ニシテ善美ナル國體ノ基礎ナリト謂フヘシ故ニ本條ハ上代ノ所謂屯家御田ノ類專ラ一部ノ御料ニ屬スル者ヲ指ス而シテ皇室經費ハ別ニ憲法ヲ以テ之ヲ定メタリ

第四十六條 世傳御料ニ編入スル土地物件ハ樞密顧問ニ諮詢シ勅書ヲ以テ之ヲ定メ宮内大臣之ヲ公告ス

恭テ按スルニ土地物件ノ世傳御料ニ編入スル者ハ普通民法ノ外ニ於テ處分セララルヘキ者ナリ故ニ樞密顧問ノ議ヲ詢フノ後勅書ヲ以テ之ヲ定ムルハ其ノ慎重ヲ致スナリ又宮内大臣ヨリ公告スルハ臣民ヲシテ普ク之ヲ聞知ラシムルナリ

皇室常産ハ皇室ノ圖書ニ登録シ其ノ土地ハ地籍ニ明記スルヲ要ス敕旨ヲ以テ一タヒ皇室常産ニ編入セラレタル者ハ更ニ分離シ

テ私産トナサル、コトヲ得ス

第九章 皇室經費

第四十七條 皇室諸般ノ經費ハ特ニ常額ヲ定メ國庫

ヨリ支出セシム

恭テ按スルニ皇室ノ經費ハ特ニ常額ヲ定メ國庫至重ノ義務トシテ毎年支出セシム蓋天皇ハ一國ノ元首トシテ臣民ヲ統治シ從テ臣民ノ正供ニ由リ其ノ需要ニ奉スルハ當然ノ權利タリ故ニ議會ハ皇室經費既定ノ歲額ヲ議シ及之ヲ檢査スルノ權アルコトナシ但シ新ニ増額ヲ要スルニ當テハ更ニ議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス故ニ常額ト謂フナリ

皇族ノ歲費ハ皇室經費ヨリ支辨シ別ニ國庫豫算ノ科目ヲ設ケス

所謂諸般經費ノ中ニ包括スル者ナリ

第四十八條 皇室經費ノ豫算決算検査及其ノ他ノ規則ハ皇室會計法ノ定ムル所ニ依ル

恭テ按スルニ皇室經費ハ既ニ議會ノ議ヲ經ス又會計検査院ノ検査ヲ要セス而シテ別ニ皇室會計法ニ依リ其ノ條規ヲ定メテ以テ精確ト節約トヲ要スヘキナリ

第十章 皇族訴訟及懲戒

第四十九條 皇族相互ノ民事ノ訴訟ハ勅旨ニ依リ宮内省ニ於テ裁判員ヲ命シ裁判セシメ勅裁ヲ經テ之ヲ執行ス

恭テ按スルニ皇族ト皇族トノ間ニ起ル訴訟ハ内廷ノ裁判ニ依ル

ヘシ故ニ宮内省ニ於テ之ヲ勸解セシメ勸解成ラサルトキハ特ニ
裁判員ヲ命シテ之ヲ裁判セシメ更ニ勅裁ヲ經テ之ヲ執行セシム
其ノ他普通ノ民法ニ於テ裁判所ノ登録又ハ處分ヲ要スル者ハ皆
宮内省之ニ當ル

第五十條 人民ヨリ皇族ニ對スル民事ノ訴訟ハ東京
控訴院ニ於テ之ヲ裁判ス但シ皇族ハ代人ヲ以テ訴
訟ニ當ラシメ自ラ訟廷ニ出ルヲ要セス

恭テ按スルニ本條人民ヨリ皇族ニ對スル民事ノ訴訟ハ東京控訴
院ニ於テ之ヲ裁判スルコトヲ定ムルハ皇族ノ特權ヲ示スナリ而
シテ其ノ詳節ハ蓋別ニ之ヲ定ムル所アラムトス其ノ皇族ヨリ原
告トシテ人民ニ對スル訴訟ハ仍普通ノ訴訟原則ニ依リ被告人ノ
所轄裁判所之ヲ裁判スヘキナリ

普通ノ訴訟人ハ裁判所ヨリ本人訊問ヲ要シ召喚スルニ當リ訟廷ニ出サルコトヲ得ス而シテ皇族ハ自ラ出ルヲ要セサルハ此レ亦特權タリ

其ノ他ノ訴訟手續ニシテ此ノ典範又ハ他ノ法律ニ別段ノ條規ナキ者ハ總テ普通ノ裁判構成法及訴訟法ニ依ル

第五十一條 皇族ハ勅許ヲ得ルニ非サレハ勾引シ又ハ裁判所ニ召喚スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ皇族ハ犯罪アルモ之ヲ勾引スルコトヲ得ス其ノ現行犯ニ於ケルモ亦同シ又刑事ノ審問ノ爲ニ裁判所ニ召喚スルコトヲ得ス豫審判事書記ト俱ニ其ノ所在ニ就テ陳述ヲ聽クヘシ但シ天皇ノ勅許ヲ得タルトキハ例外トス

皇族證人タルノ場合ハ治罪法ニ之ヲ掲ク第百八十七條而シテ勅許ヲ予

フルノ限ニ在ラス

第五十二條 皇族其ノ品位ヲ辱ムルノ所行アリ又ハ
皇室ニ對シ忠順ヲ缺クトキハ勅旨ヲ以テ之ヲ懲戒
シ其ノ重キ者ハ皇族特權ノ一部又ハ全部ヲ停止シ
若ハ剝奪スヘシ

恭テ接スルニ皇族ハ皇室ニ對シ忠順ノ義務ヲ負フ者ナリ故ニ皇
室ニ不忠ナルト品位ヲ辱ムルノ汚行トハ俱ニ紀律ヲ敗ル者トシ
懲戒ノ處分ヲ被ルヘシ

皇族懲戒ノ權ハ天皇ノ親ヲ執ル所タリ懲戒ノ重キ者ハ皇族特權
ノ一部又ハ全部ヲ停止シ又ハ全部ヲ剝奪ス停止ハ期限アリ剝奪
ハ期限ナシ

第五十三條 皇族蕩産ノ所行アルトキハ勅旨ヲ以テ

治産ノ禁ヲ宣告シ其ノ管財者ヲ任スヘシ

恭テ按スルニ皇族蕩産ノ所行アル者ニ對シ民法上治産ノ禁ヲ宣告シ及其ノ管財者ヲ命シ財産ヲ管理セシムルコト亦勅旨ニ由ル此レ固ヨリ天皇監督ノ權ニ屬スレハナリ

第五十四條 前二條ハ皇族會議ニ諮詢シタル後之ヲ勅裁ス

恭テ按スルニ皇族會議ハ皇室ノ内事ニ付天皇ノ諮詢ニ應フヘク而シテ皇族ノ懲戒又ハ治産ノ處分ニ付テハ特ニ諮詢ヲ以テ必要トス

第十一章 皇族會議

第五十五條 皇族會議ハ成年以上ノ皇族男子ヲ以テ

組織シ内大臣樞密院議長宮内大臣司法大臣大審院長ヲ以テ參列セシム

恭テ按スルニ皇族會議ハ第一ニ皇室典範ニ係ル改正ノ諮詢ヲ受ケ第二ニ第十九條第二項及第二十五條ノ場合ニ於テ其ノ議ヲ經ルヲ要シ第三ニ皇嗣ヲ換フル時ニ諮詢ヲ受ケ第四ニ皇族ノ懲戒及治産處分ノ諮詢ヲ受ケ其ノ他皇室ニ係ル重要ノ事件及民法ニ於テ親族會議ニ係ル事件ノ諮詢ヲ受クヘシ其ノ議事ノ規則ノ若キハ蓋別ニ之ヲ定メラルヘキナリ

第五十六條 天皇ハ皇族會議ニ親臨シ又ハ皇族中ノ一員ニ命シテ議長タラシム

恭テ按スルニ天皇皇族會議ニ親臨セララル、トキハ親ヲ會議ヲ統理セラル其ノ親臨セラレサルトキ又ハ親ヲ會議ヲ統理セラレサ

ルトキハ別ニ議長ヲ指命セラルヘシ

第十二章 補則

第五十七條 現在ノ皇族五世以下親王ノ號ヲ宣賜シタル者ハ舊ニ依ル

恭テ按スルニ典範ノ定ムル所ニ依レハ五世以下ノ王ハ親王ト稱フルコトヲ得ス本條ハ現在ノ宣下親王ノ爲ニ其ノ既得ノ尊榮ヲ奪ハサルナリ而シテ其ノ繼嗣以下未タ宣下アラサルハ典範ノ本則ニ依ルコト知ルヘキナリ

第五十八條 皇位繼承ノ順序ハ總テ實系ニ依ル現在皇養子皇猶子又ハ他ノ繼嗣タルノ故ヲ以テ之ヲ混スルコトナシ

恭テ按スルニ現在ノ親王家親王宣下アリシハ多クハ皇養子皇猶子タルノ近例ニ從ヒシナリ第四十二條ハ皇族養子ノ制ヲ廢ス而シテ現在既ニ行ヘル者ニ上及セス但シ皇位繼承ノ順序ハ總テ宗支遠近ノ實系ニ依リ養子猶子ノ名稱及甲家ノ子乙家ノ繼嗣タリシニ拘ラス其ノ間多少紛錯アルモ其ノ名ニ因テ其ノ實ヲ混スルコトナカルヘキナリ

第五十九條 親王内親王王女王ノ品位ハ之ヲ廢ス

恭テ按スルニ親王内親王ノ叙品王女王ノ叙位ハ蓋中古ニ在テ隋唐ノ制ニ依レルナリ皇族既ニ品位ヲ以テ班別ヲ爲シ而シテ親疎長幼ノ倫序從テ失ヘリ抑々皇族ハ生レテ潢流ノ尊榮ニ居ル而シテ人臣ノ位階ニ依テ陞叙スルノ比ニ非ス本條ニ品位ノ舊制ヲ廢スルハ一ラ倫序ヲ以テ重シトスルニ因ルナリ

第六十條 親王ノ家格及其ノ他此ノ典範ニ抵觸スル

例規ハ總テ之ヲ廢ス

恭テ按スルニ有栖川宮、閑院宮ハ明治元年閏四月ノ令ニ依リ世襲

親王タリ有親王宣下閑院宮嫡子相續之節先是迄之通爲御養子可

有親王賀陽宮、山階宮、聖護院宮、仁和寺宮、華頂宮、聖高院宮、梶井宮ハ

同令ニ依リ一代皇族タリ嫡子始賜姓可被列臣籍三年十二月十日ノ令ニ四親

王伏見宮、桂宮、有栖川宮ノ外ノ親王家ハ二代目ヨリ賜姓華族ニ列

セラル、コトヲ定メラル山階宮、東伏見宮、梨本宮十四年二月小松宮親王ヲ世

襲皇族ニ山階宮親王ヲ二代皇族ニ列セラル十六年七月久邇宮親

王ヲ二代皇族ニ列セラル今典範ニ於テ已ニ皇養子皇猶子ノ制ヲ

廢シタルトキハ從テ世襲親王ノ舊制モ亦廢除ニ歸セサルコトヲ

得ス皇子孫ハ諸王ト雖亦皇族タルコトヲ失ハサルトキハ從テ賜

姓ノ制及一代皇族又ハ二代皇族ノ家格ハ亦廢除ニ歸セサルコト
ヲ得ス

第六十一條 皇族ノ財産歳費及諸規則ハ別ニ之ヲ定

ムヘシ

恭テ按スルニ皇族ノ各個財産及歳費廩給ノ方法及共ノ他皇族ニ
係ル諸般ノ規則ハ蓋別ニ皇族令ヲ以テ之ヲ定メムトス故ニ典範
ハ務メテ大體ヲ舉ク而シテ詳節繁文ニ涉ルコトヲ欲セサルナリ

第六十二條 將來此ノ典範ノ條項ヲ改正シ又ハ増補

スヘキノ必要アルニ當テハ皇族會議及樞密顧問ニ
諮詢シテ之ヲ勅定スヘシ

恭テ按スルニ皇室典範ハ天皇立憲ヲ經始シタマヘル制作ノ一ト
シテ永遠ニ傳ヘ皇室ノ寶典タリ故ニ本條其ノ紛更ヲ慎ムノ意ヲ

致スナリ抑憲法ニ據ルニ其ノ條項ニ改正ヲ要スルコトアルトキ
ハ之ヲ議會ノ議ニ付シ特ニ鄭重ナル方式ニ依リ議決セシム而シ
テ皇室典範ニ於テハ獨皇族會議ト樞密顧問ニ諮詢スルニ止マリ
憲法ト同一ノ軌轍ニ依ラサルハ何ソヤ蓋皇室ノ事ハ皇室自ラ之
ヲ決定スヘクシテ之ヲ臣民ノ公議ニ付スヘキニ非サレハナリ